

能界展望 2021年（令和3年）

宮本，圭造

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

243

(終了ページ / End Page)

252

(発行年 / Year)

2024-03-25

能界展望 二〇二一年（令和三年）

宮本圭造

はじめに

二〇二〇年晩冬に感染拡大が始まった新型コロナウイルスは、二年目を迎えても一向に鎮まる気配を見せない。当初は数ヶ月で終息するかも思われていたコロナ禍は一体いつになつたら終わるのか。誰もが見えない敵に不安を感じ、重苦しい気分の中で二〇二二年は始まった。「三密」を避ける目的で導入されたイベント入場者数の制限は二〇二〇年九月に一度撤廃されたが、同年末から感染者が爆発的に増加し、二〇二一年一月七日に東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県、一月十三日に栃木・愛知・岐阜・京都・大阪・兵庫・福岡の各府県に二度目の緊急事態宣言が発令。能楽堂の入場者数にも再び五十パーセントの制限がかけられることになる。宣言を受けて、一月から二月にかけての公演にも中止・延期が続出。なかには、この時期に予定されていた延期公演が再びの延期を余儀なくされる、というケースもあった。

感染者が完全に減少しきらないまま、オリンピックの聖火リレーのタイミングに合わせるかのように、三月十一日に緊急

事態宣言は再度解除されるが、変異株の流行が勢いを増し、四月二十三日には三たび東京・関西圏に緊急事態宣言が発令。その影響で、四月末から六月にかけての公演にまたもや中止・延期が相次いだ。中止とすべきか、延期とすべきか、会の主催者はそれぞれに難しい判断を迫られることになるが、実施が決定した場合も、感染者数の動向に気をもみながら、緊急事態宣言中は五十パーセント入場率でチケット販売をし、規制解除後に急遽チケットの追加販売を開始するなど、平時では考えられない臨機応変の対応が求められる日々が続いた。無事開催された催しであっても、この番組、この演者であれば、もつと大勢の観客が集まるはずなのに、という催しに空席が目立つことも多かった。先の見えない状況が、ポディブローのように少しずつダメージを蓄積させ、関係者を疲弊させている。それが、二〇二一年前半期の能楽界の状況だったのでないかと思う。

七月末から九月はじめにかけて国立能楽堂で開催された東京2020オリンピック・パラリンピック能楽祭は、能楽協会・能楽会他が主催する大規模な企画で、この年のハイライ

トというべき催しであったが、肝心のオリンピック・パリオリンピックが無観客開催となったため、当初想定されていた海外からの見物客をほとんど集めることが出来ず、思惑が外れてしまったのは実に残念なことであった。長年にわたって準備してこられた関係者の無念たるや、想像するに余りある。一方で、舞台上の成果は、苦境に決して負けることのない演者の熱気にあふれ、大変素晴らしいものであった。

振り返ってみると、コロナ禍に翻弄されつつも、この年の舞台にはきわめて充実したものが多かったように思う。圧倒的な力を見せつけた観世清和の翁附独演五番能を筆頭に、野村万作の卒寿を記念した公演での一門の結束、ますます芸に深みを増している野村萬・山本東次郎の健在ぶり、古稀を迎えた田崎隆三の「嫉捨」、「獅子三態」での金井雄資の〈望月〉、かつて中堅・若手と言われた世代が芸の絶頂期を迎えつつある囃子方の面々などなど、筆者が見ることのできた限られた範囲だけでも印象的な舞台が少なくなく、コロナ禍における能楽界の底力を実感できた一年であった。浅見真州・野村四郎という現代の能楽界を代表する二人を時を隔てずして失った喪失感は大きく、コロナ禍のために舞台上での人生最後の輝きを十分に見届けることが出来なかったのはまことに残念だったが、第一回観世淳夫之会、第一回野村太一郎狂言の会がこの年からスタートしたのを始め、「山本会別会」で〈しびり〉を勤めた山本則光、「三ノ会」で〈靱猿〉の猿を勤めた茂山郁馬など、次世代を担う演者の活躍が楽しみな一年でもあつ

た。また、文化庁の「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」の一環として、能楽協会的主导により「日本全国 能楽キャラバン！」と銘打った大規模な全国公演が始まり、翌年一月にかけて全国二十地域、三十五会場で、七十一もの公演が行われたことも特筆される。以下、主な舞台等をいくつかの項目に分け、時系列で掲出する。関東以外の催しへの目配りが十分ではなく、また重要な公演の遺漏も少なくないと思われるが、御寛恕願いたい。

さまざまな催し・その他

◎観世喜之の舞納め

2月14日。矢来能楽堂。満八十五歳となった観世喜之が同日、観世九皇会での〈鶴亀〉をもって能のシテの舞納めとした。

◎日本博皇居外苑特別公演「祈りのかたち」

「日本博」の一環として行われた特別公演。皇居二重橋を背後に望む特設舞台で行われた。3月12日は〈翁〉（観世清和）・一調（杜若）（金春憲和）・囃子（羽衣）（友枝昭世）・狂言（三本柱）（野村万作）・能（高砂祝言之式）（観世清和）。3月14日は琉球舞踊に続き、囃子（岩船）（宝生和英）・狂言（葎）（石田幸雄）・能（石橋 大獅子）（観世清和）。なお3月13日には浦浜念仏剣舞に続き、脇仕舞（羅生門）（宝生欣哉）・囃子（東北）（金剛永謹）・狂言（呼声）（山本東次郎）・能（土蜘蛛 入違之伝・白頭・眷属出之伝・ササガニ）（観世鏡之丞）が予定されていたが、荒天のため中止となった。

◎心齋橋バルコグラウンドオープン記念能舞台披き

兵庫県三田市で有馬能楽堂を運営している三田屋本店の心齋橋バルコ店に能舞台を併設したレストランが開業。舞台披きは1月21日に予定されていたが、新型コロナウイルス感染防止のため3月18日に延期となった。舞囃子(高砂)大槻文藏。

◎山本則直十三回忌追善山本会別会

3月21日。国立能楽堂。(枕物狂)山本泰太郎、(成上り)山本東次郎、(花子)山本凛太郎ほか。(枕物狂)と(花子)は披き。

◎二十六世観世宗家観世清和独演翁附五番能

6月20日。観世能楽堂。第四十九回正門別会特別公演。第一部・第二部の二部制で、第一部の開演は午前10時、第二部の終演は午後8時40分。(翁)高砂 八段之舞(観世清和、(末広かり)野村万作、仕舞(砧)観世鏡之丞、(清経 恋之音取)観世清和(以上第一部)、(羽衣 彩色之伝)観世清和、(二人袴)山本東次郎、(卒都婆小町 一度之次第)観世清和、一調(松虫)梅若実、(石橋 大獅子)観世清和。2000年に浅見真州が行って以来となる翁附の独演五番能。当初は令和2年6月21日に予定されていたが、コロナ禍のため本年に延期となった。

◎香里能楽堂開館五十五周年記念能

7月4日。香里能楽堂。シテ方宝生流辰巳家の舞台の五十五周年を記念する催し。(大蛇)辰巳満次郎、(七人狸々)宝生和英ほか。同能楽堂は京阪電鉄の高架化に伴い7月18日の公演を最後に改修工事に入った。

◎野口傳之助米寿記念能と囃子の会

7月18日。大槻能楽堂。二〇二〇年九月二十二日の延期公演。森田流笛方の野口傳之助の米寿を記念する会。一管(米寿之音取)野口傳之助・(傘寿之音取)左鴻雅義・(眞之神子神楽)杉市和、能(景清 松門之出)大槻文藏・(鸚鵡小町 杖三段之舞)観世清和ほか。

◎東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック能楽祭(喜びを明日へ)

東京オリンピック・パラリンピックの大会期間に合わせて開催された特別公演。7月27日・28日・29日・8月2日・3日・27日・9月3日。国立能楽堂。オリンピック能楽祭は一日目(翁 十二月往来・父尉延命冠者)金春憲和、(二人袴)野村萬、二日目(武悪)山本東次郎、(屋島)観世清和、三日目(業平餅)大藏彌太郎、(杜若 沢辺之舞)宝生和英、四日目(鎌腹)三宅近成(右矩の代演)、(三輪 神遊)(友枝昭世)、五日目(舟渡鯉)野村万作、(道成寺)金剛龍謹、他を上演。パラインピック能楽祭は8月27日と9月3日に行われ、一日目(佐渡狐)茂山あきら、(土蜘蛛 ササガニ)加藤眞悟、二日目(手話狂言(梟山伏)江副悟史、(羽衣 盤渉)柏山聡子)を上演。

◎日本全国能楽キャラバン!宝生流東京公演「獅子三題」

10月31日。宝生能楽堂。獅子が登場する能・狂言の秘曲を同時上演するという企画。(望月)金井雄資、(獅子鯉)山本東次郎、(石橋 赤黒)宝生和英。(獅子鯉)は山本東次郎家のみ(伝承曲)。(石橋 赤黒)は赤獅子と黒獅子が対峙する新演出

パージョン。考案者の宝生和英氏によれば、新型コロナウイルスの疫病禍から生まれた、終わりのない対立への恐怖を表現した演出という。

◎野村万作卒寿記念公演

10月28日・31日の「狂言ござる乃座」、11月21日の「万作を観る会」が野村万作卒寿記念として開催。「狂言ござる乃座」では、野村万作の皇帝、萬斎の通辞、裕基の相撲取りの三世代に加えて、三十名近い一門その他の演者が一堂に会した（唐人相撲）、「万作を観る会」では野村万作の（枕物狂）他が上演された。

【復曲・新作】

◎新作狂言（地獄大変）

1月23日。豊田市能楽堂。「じごくらくごじ」地獄・極楽・地獄」と題する公演。二世井上松次郎の新作狂言（地獄大変）ほかを上演。飯塚恵理人「意欲的な試み」（『能楽タイムズ』五月号）に報告が載る。

◎復曲能（篁）

京都観世会による第六回復曲試演の会。当初は令和2年4月にプレ公演、6月に本公演の予定であったが、延期となり、同年12月23日のプレ公演を経て、令和3年2月13日に京都観世会館で上演。監修・西野春雄。出演はシテ味方玄・ツレ片山九郎右衛門・ワキ宝生欣哉ほか。多川俊映「復曲能「篁」をみて」（『観世』五・六月号）、樹下好美「第六回復曲試演の

会（篁）管見」（『能楽タイムズ』六月号）に報告が載る。

◎復曲能（和田酒盛）

2月13日。平塚市中央会館。第八回湘南ひらつか能狂言として、第六回（伏木曾我）、第七回（虎送）に続く曾我物の復曲出演はシテ加藤眞悟・ツレ梅若久紀・古室知也・長谷川晴彦・ワキ梅村昌功ほか。森村進「曾我兄弟物の復曲第三弾「和田酒盛」」（『能楽タイムズ』四月号）に詳細な報告が載る。同年12月11日に名古屋能楽堂でも再演。

◎新作能（聖徳太子）

5月9日。聖徳太子廟がある叡福寺で太子遠忌大法会期間中に奉納。聖徳太子一四〇〇年遠忌に合わせて叡福寺が制作を委嘱した新作能。作・竹田真砂子。監修・演出・節付は大槻文藏。当日は声明、新作狂言（太子手鉢）野村萬斎に続き上四〇〇年御遠忌大法会に新作能「聖徳太子」を上演」（『観世』七・八月号）に報告が載る。

◎復曲能（綱）

6月18日。山中能舞台。「やお発高安能未来継承プロジェクト」の催し。（綱）は渡辺綱に腕を斬られた鬼が腕を奪い返す物語に取材した曲。能本作成・監修は西野春雄が担当。シテ山中雅志、ワキ原大ほかの出演。細合道子「報告」令和に蘇る能（綱）―五百年ぶりの復元能―」（『能楽タイムズ』八月号）に詳細な報告記事、西野春雄「散逸曲（綱）の復元」（『能楽研究』四十六号）に復曲の経緯と上演詞章が載る。

◎新作能〔長崎の聖母〕(ヤコブの井戸)

8月4日～8日。座・高円寺。2005年に長崎・浦上天主堂で初演された多田富雄作の新作能〔長崎の聖母〕と2019年にウィーンで初演されたディートハルト・レオポルド作の新作能〔ヤコブの井戸〕との同時連続上演。〔ヤコブの井戸〕は今回が日本初演で、対立する二つの民族が砂漠で一つの井戸を分け合うという『新約聖書』の物語に取材した作品。両曲共にシテは清水寛二。清水は演出も担当した。その他の出演はワキ大日方寛・アイ小笠原由嗣(以上〔長崎の聖母〕)、ワキ殿田謙吉・アイ小笠原弘晃・みよんふあ(以上〔ヤコブの井戸〕)ほか。〔長崎の聖母〕にはメゾソプラノの波多野睦美も出演。ドラマトゥルク・小田幸子。当初はワキツレとしてヤクブ・カルポルク、アイとしてニーナ・フォグが出演予定であったが、コロナ禍のため来日中止となり、小笠原・みよんふあが代演。能の形式を大胆に破り、様々な解釈を観客に投げかけた〔ヤコブの井戸〕が鮮烈で、みよんふあが「アリアン」を歌う場面は、パレスチナの問題が決して遠い国の出来事ではなく、韓国との間に様々な軋轢を抱える我々の問題でもあるというメッセージを突き付けた。ライブ配信あり。

【新しい試み、他ジャンルとの融合など】

◎金曜ドラマ「俺の家の話」

1月22日から3月26日までTBS系で放送。「観山」流シテ方で人間国宝の観山寿三郎とその長男でプロレスラーの観

山寿一親子を軸に、それを取り巻く人々の姿を描くホームドラマ。脚本・宮藤官九郎。観山寿三郎を西田敏行、寿一を長瀬智也が演じた。能楽指導は浅見慈一。宝生能楽堂、喜多能楽堂が撮影に協力。〔道成寺〕(隅田川)が劇中に登場した。

◎漫画「ワールド・イズ・ダンシング」

三原和人作。少年時代の世阿弥を描いた作品。『モーニング』誌で令和3年より連載スタート。同年8月に単行本の第1巻が刊行された。

◎オペラ「Only the Sound Remains—余韻—」

6月6日。東京文化会館。フィンランドの作曲家カイヤ・サーリアホが能〔経政〕(羽衣)に基づき作曲した新作オペラの日本初演となる公演。世界初演は2016年、アムステルダムのおランダ国立オペラ。1916年にロンドンで出版された『"Noh" or Accomplishment: A Study of the Classical Stage of Japan』のエズラ・パウンドの英語台本に拠る。クレマン・マオ・タカス指揮東京文化会館チェンバールオーケストラ、新国立劇場合唱団、ミハウ・スワヴェツキ(CT)、ブライアン・マリー(B&B)、森山開次(ダンス)による上演。演出アレクシス・バリエール、振付森山開次。ヴェネツィア・ピエンナレ等との国際共同制作。カンテレ(フィンランドの民族楽器)を加えたオーケストラと、PAによってエコーを響かせた声楽とが夢幻的な響きを生み出していた。

◎「神・鬼・麗 三大能」2020」

8月27日より動画配信。スペクタクルライブステージと題

し、最新の映像技術と能楽との融合により、全く新しい舞台を創出する企画。〈高砂〉〈紅葉狩〉〈羽衣〉の三曲をベースに、斬新な照明演出、森英恵デザインの新装束、洋楽を取り入れるなど、様々な新しい試みがなされた。映像は東映ツークン研究所による。監修・観世清和、総合演出・坂口貴信、総合監督・深作健太。出演は観世三郎太・坂口貴信ほか。

◎「未練の幽霊と怪物―「挫波」「敦賀」―」

6月5日～26日。K A A T神奈川芸術劇場・大スタジオ。K A A T神奈川芸術劇場プロデュース。2020年6月に予定されていた公演の延期公演。作・演出・岡田利規、音楽監督・内藤和久、出演・森山未來・片桐はいりほか。新国立競技場の設計者としてコンペで選ばれながら、その後採用を撤回され、ほどなくして亡くなった建築家、ザハ・ハデイドをシテとする「挫波」、旅行者が敦賀の原子炉もんじゅを訪れる場面から始まる「敦賀」。夢幻能の形式に触発された二演目を上演。

◎錬肉工房創立五十周年記念企画「盲人達」

6月24日～27日。K A A T神奈川芸術劇場・中スタジオ。岡本章が主宰する錬肉工房とK A A T神奈川芸術劇場との提携公演。現代能楽集シリーズの作品。原作はM・メーテルリンクの同名戯曲。どこかに行っただま帰ってこない神父を待ち続ける孤島の施療院の盲人達の姿を、能の演技・様式を活かしつつ、クロス劇として表現。シテ方金春流の櫻間金記のほか、シテ方観世流の鶴澤久・清水寛二・西村高夫も参加。

横道蘭「錬肉工房創立五十周年記念公演 現代能楽集「盲人達」を見て」（『能楽タイムズ』八月号）に詳細な報告が載る。

◎能とオペラ「静、愛と死」

8月7日。神奈川県立県民ホール。「能とオペラの融合による創作舞台」として、第一部で能「船弁慶」中森昌三、第二部でオペラ「静と義経」（1993年初演）が演じられた。オペラの作曲は三木稔、台本はなかにし礼。田中祐子指揮の神奈川県フィル、砂川涼子（S）、中井亮一（T）他の上演。コロナ禍のために無観客ライブ配信となった。配信映像は現在も神奈川フィルのユーチューブチャンネルで視聴可能。

◎東洋―西洋のスパーク

8月22日。サントリーホール大ホール。サントリーホールサマーフェスティバルのプログラムの一つ。2017年にパリのシテ・ド・ラ・ミュージックで初演された細川俊夫作曲のオペラ『二人静―海から来た少女』の日本初演。パリでの世界初演と同じく、マティアス・ピンチャー指揮アンサンブル・アンテルコンタンプラン、シエシユティン・アヴェエモ（S）、青木涼子（能声楽家）による上演。能（二人静）に基づき、地中海の海辺に流れ着いた難民の少女に静御前の霊が取り憑くという物語を平田オリザが日本語の台本として仕上げ、それを英語に翻訳したリブレットが用いられた。抗いがたい暴力の犠牲となった二人の女性の悲劇が時空を超えて重なり合い、二人の声がやがて一つになっていく様を描く。コロナ禍の最中、海外からのオーケストラの来演が実現し、完成度の

高い上演が繰り返げられた。

◎第十六回山井綱雄の会

11月5日。国立能楽堂。新作能(鷹姫)の金春流による初上演。鷹姫・宝生和英、老人・櫻間金記と観世喜正、空賦麟・山井綱雄。コロスは金春・金剛・喜多・ワキ方宝生流・狂言方大藏流の混成。シアターカンパニー・カクシンハン主宰の木村龍之介が演出を担当。冒頭でシェイクスピアの『ヘンリー六世』の一場面をプロローグとして俳優が演じ、鷹姫の登場楽にG・マラーの交響曲第五番アダージェットを流すなどの新しい試み。老人(櫻間金記)から幽体離脱したもう一人の老人(観世喜正)を舞台に出すなど、登場人物にも工夫がこらされた。

【展覧会】

◎日本人と自然―能楽と日本美術―

4月7日～6月27日。国立能楽堂資料展示室。絵画や工芸品に見える能楽意匠をテーマとした展示。「春夏秋冬」「草木成仏」「花鳥風月」の主題に沿って、謡本・能装束・鼓胴のほか、琳派の絵画、蒔絵箱などが陳列された。

◎自然が彩る かたちとこころ―絵画・茶道具・調度品・能装束など―

7月10日～8月22日。三井記念美術館。絵画・茶道具等に見える自然の景物の意匠に焦点を当てた展示。同館蔵の能装束も出陳。

◎竹内コレクシオン受贈記念特別展

10月7日～令和4年3月6日。金沢能楽美術館。金沢出身の金春流太鼓方・柿本豊次ゆかりの楽器等を中心とした展示。柿本豊次に師事した長野県東御市の竹内春彦が師匠から譲り受けたもので、柿本の三十三回忌を機に同館に寄贈された。

◎上杉家伝来能面・能装束―語りはじめた面袋―

10月16日～12月8日。米沢市上杉博物館。江戸期を通じて金剛流の能を採用した米沢藩上杉家伝来の能面・能装束を中心とした展示。上杉家の能面・能装束は現在その過半が東京国立博物館に所蔵されており、その里帰り展という位置付けであるが、数年間にわたる事前調査の成果を踏まえ、現在は散逸して東博以外の所蔵となっている様々なコレクションについても併せて展示(一部写真パネル)。かつての上杉家伝来能道具の全体像を可能な限り復元する。図録も充実した内容。

◎畠山記念館の名品―能楽から茶の湯、そして琳派―

10月19日～12月5日。京都国立博物館。荏原製作所創業者の畠山一清が蒐集した畠山記念館のコレクション展。加賀前田家伝来の能道具等を展示。

◎小道具から見る能

11月10日～12月23日。国立能楽堂資料展示室。能の舞台で用いられる小道具類をテーマとした企画展。面や装束の展示は頻繁に催されるが、持ち物・差し物等に焦点を当てた展示は珍しい。間近に見る機会が少ない小道具をつぶさに鑑賞できる貴重な展示であった。

襲名・その他

◎シテ方観世流の大槻文藏が3月、おおさか観光大使に就任した。「文化芸術のまち大阪」の国内外への発信を期待されるもの。

◎笛方森田流の槌矢亮は4月1日をもって野口亮に改名した。

◎シテ方観世流の野村四郎は4月3日、雪号を授与され、野村幻雪と改名した。『観世』七・八月号に詳細記事が載る。

◎狂言方と泉流の野村萬斎が4月、石川県立音楽堂邦楽監督に就任した。

◎狂言方と泉流の野村萬斎が6月、公益社団法人全国公立文化施設協会会長に就任した。

荣誉・受賞

◎日本芸術院賞 観世清和(シテ方観世流)

2020年10月4日の観世会秋の別会で演じられた(山姥雪月花之舞)をはじめ近年の優れた舞台成果に対し。

◎春の褒章

旭日中綬章 谷村育子(シテ方観世流)

旭日中綬章 國川純(大鼓方高安流)

旭日中綬章 馬場あき子(歌人)

◎文化庁長官表彰 一噌庸二(笛方一噌流)

◎秋の褒章

瑞宝中綬章 西野春雄(能楽研究者)

◎観世寿夫記念法政大学能楽賞 松岡心平(能楽研究者)・野村萬斎(狂言方と泉流)

◎催花賞 三宅右近(狂言方と泉流)と日本ろう者劇団

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】(2021年6月16日現在)

《会長》野村四郎(幻雪)※

《副会長・常務理事》金剛永謙

《常務理事》観世清和・亀井保雄・豊嶋彌左衛門・粟谷能夫・山本東次郎

《理事》梅若実・浅見真州(7月13日逝去)・金春安明・高橋

忍・宝生和英・武田孝史・高林白牛口二・宝生欣哉・飯富雅

介・杉市和・観世新九郎・亀井実・小寺佐七・山本哲也・茂

山七五三・野村萬斎

《監事》櫻間金記・小林与志郎

【会員数】479名

※野村幻雪の逝去(8月21日)に伴い、11月17日付で金剛永

謙が会長、観世清和・山本東次郎が副会長に就任。

◎能楽協会

【役員構成】

《理事長》観世鏡之丞

《専務理事》本田光洋

《専務理事》本田光洋

《常務理事》武田宗和・香川靖嗣・國川純・観世喜正

《理事》井上裕久・大倉源次郎・大藏彌太郎・小倉伸二郎・金井雄資・金子敬一郎・桜井均・種田道一・辻井八郎・中村邦生・成田達志・野村又三郎・廣田幸稔・藤波重彦・宝生欣哉・水上優・山井綱雄・山本章弘

《監事》中村元彦・丸岡圭一・大和滋

《顧問》野村萬・観世清和・金剛永護

【会員数】 1095名

シテ 観世358 金春97 宝生151 金剛63 喜多47 小計716

ワキ 高安12 福玉15 宝生22 小計49

笛 一噌11 森田42 藤田4 小計57

小鼓 幸28 幸清8 大倉17 観世4 小計57

大鼓 葛野9 高安11 大倉10 石井10 観世2 小計42

太鼓 観世15 金春18 小計33

狂言 大蔵75 和泉66 小計141

支部別 東京537 名古屋87 北陸69 京都141 大阪135 神戸

40 九州69 本部扱17

物故者

●橘保尚

シテ方観世流。1月30日。享年79。神戸市出身。橘晏正の次男。吉井司郎・片山幽雪に師事。神戸観世会・能楽協会神戸支部・片山能楽会に所属。

●西出明雄

シテ方観世流。5月10日。観世喜之所属。岡山県の能楽普及に尽力。

●岡田晃一

シテ方観世流。5月25日。享年66。東京都出身。岡田朗詠の長男。梅若吉之丞に師事。

●浅見真州

シテ方観世流。7月13日。享年80。東京都出身。浅見真健の五男。父・兄真高及び観世元昭・観世寿夫・八世観世鏡之亟に師事。1945年に《雲雀山》子方で初舞台、57年に《敦盛》で初シテ。《重衡》《鐘巻》の復曲、異流競演の《舞車》、独演五番能など、意欲的な活動で一時代を画した。観世寿夫記念法政大学能楽賞・芸術選奨文部大臣賞・芸術院賞受賞。紫綬褒章・旭日小綬章・フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ。追悼記事に「浅見真州師追悼」(「観世」十一・十二月号)、西野春雄「追悼 浅見真州さん」(「能楽タイムズ」九月号)等がある。

●當山孝道

シテ方宝生流。7月14日。享年76。當山俊道の四男。宝生重英・宝生英雄に師事。

●野村幻雪

シテ方観世流。8月21日。享年84。東京都出身。六世野村万蔵の四男。本名、野村四郎。十五歳まで和泉流狂言方として活動し、初舞台は三歳の時の《鞍猿》子方。1952年に二十五世観世左近元正に内弟子として入門。55年に《俊成忠

度)で初シテ。2008年の(関寺小町)で三老女を全て披露。
 (利休)(無明の井)など、新作能への出演も多数。観世会・鏡
 仙会の重鎮として活躍する傍ら、東京芸術大学邦楽科教授に
 就任し、後進の指導にも尽力した。21年4月に雪号を授与さ
 れ、「幻雪」と改名。日本能楽会会長。観世寿夫記念法政大
 学能楽賞・日本芸術院賞・文化庁芸術祭賞・芸術選奨文部大
 臣賞受賞。紫綬褒章・旭日小綬章。重要無形文化財(各個認
 定/人間国宝)認定。追悼記事に「野村幻雪師追悼」(『観世』
 十一・十二月号)、羽田昶「野村四郎さん改メ幻雪氏を偲ぶ」
 (『能楽タイムズ』十一月号)等がある。

●粟谷幸雄

シテ方喜多流。8月27日。享年89。九州における喜多流の
 普及に尽力。

●瀬戸内寂聴

作家。11月9日。享年99。作家として幅広く活躍する傍ら、
 新作能(夢浮橋)(蛇)を創作。

●小林千草

日本語学研究者。11月。享年75。元東海大学教授。狂言の
 言葉に関する研究で知られる。著書に『中世文献の表現論的
 研究』『幕末期狂言台本の総合的研究』など。千草子の筆名
 で小説も多数執筆した。新村出賞受賞。

●柿原崇志

大鼓方高安流。11月17日。享年80。1940年、福岡県大
 牟田市出身。柿原繁蔵の長男。父に師事。56年に舞囃子(船

弁慶)で初舞台。同年、(敦盛)で初能。59年に上京後、安福
 春雄に師事。芸術選奨文部大臣新人賞・観世寿夫記念法政大
 学能楽賞・恩賜賞・日本芸術院賞受賞。重要無形文化財(各
 個認定/人間国宝)認定。

●八寫正治

能楽研究者・評論家。12月16日。享年83。元宮内庁書陵部
 図書調査官。著書に『世阿弥の能と芸論』など。観世寿夫記
 念法政大学能楽賞受賞。